

同和問題そのⅡ

8月号では、差別の現実や解決に向けた取り組みについて記述しましたが、今月号では、同和問題の解消のために 私たちにできることは…

日常生活の中で「人権感覚」を磨きましよう

●第一に、思い込みや偏見をなくす

予断(真実を知る前に「悪い」とか、「こわい」というように、自分で勝手に決めつけてしまうこと)や偏見(十分な証拠も理由もないのに、一方的に偏った見方をしてしまうこと)、きめつけなど、根拠のない話やうわさを安易に受け入れ、自分自身で確かめ判断しようとする態度が差別につながります。うわさ話に振り回されるのではなく、正しく内容を把握しよく見極め自分自身で判断し行動しましょう。

●第三に、正しく学ぶ

現在もなお残されている同和問題は、正しく学んでいないことが大きな要因です。正しく学ぶことによって、同和問題がいかに不合理なものであるのかに気づくことができます。正しく学ぶことは同和問題だけでなく、女性の人権・子どもの人権・高齢者の人権・障がい者の人権…などすべての人権問題に共通することです。

●第二に、迷信や世間体にとらわれない

私たちは、血筋、家柄、迷信…にこだわるなど非合理的な考え方や誤った意識で判断したり、行動してしまうことではないでしょうか。たとえば、結婚式は大安の日、という

六曜(先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口)の考え方にこだわったり、また、物事を決めたり、判断したりするとき「おかしい」と感じていても「周りの人はどう思うだろうか」といった世間体を気にする傾向がないでしょうか。

私たちすべてに人権(人は生まれながらに、誰でも自分らしく、そして幸せに生活するという基本的な権利)があります。その人権の問題を自分のこととしてとらえることが大切です。

同和問題をはじめさまざまな人権問題に自分に関係ないと無関心でいてはいつまでも解消できません。

さまざまな人権問題を次の世代に残さないためにも、正しく理解し、一人一人の人権意識を高めていきましょう。

同和問題について、正しく理解し、迷信や世間体などに左右されない人権感覚を身につけましよう

熊本県人権同和政策課

「人権研修テキストⅤ」参照

益城町教育委員会

ふるさこの地名漫歩

歴史の変遷と地名

349

飯田山常楽寺⑨

以後しばらく幹縁文を意識してみます。

【常楽寺幹縁文意訳】

人知れず考えてみると飯田山常楽寺は百済国の人、日羅上人が創立された。藪を拓き山を均して草葺きの寺を建てられた。上人はわが国の敏達天皇の十二年に小さな筏を大海に浮かべ来着された。身から光を放ちその神秘さは推し測ることができない。

当時聖徳太子は幼年で粗末な服で童子たちに紛れ上人を迎えられた。上人は館に入るやすぐ太子を指しこの人は神人であると言われた。太子はすぐ走り去り衣を替えて再び上人の前に出ると、上人は平伏して再拝敬礼し太子は救世観音の教えを受け継ぎ東方粟散国(注、日本の古代の別称)に伝えられたと告げる。太子は落ち着いてこの言葉に感謝すると、上人は身から光を放ち太子もまた眉間から光を放った。太子は左右の人々に向かつて、私は中国の陳国(注、周代の国名)に居て上人の弟子となり常に日天(注、仏法の十二体の守護神のひとつ)を礼拝したので眉間から光を放つ

ようになったと語ったので、家臣たちは驚き恐れこれより以来太子は観音の化身とされ、町の四辻や路地裏でそれが噂された。

初め上人は仏を祀る寺を建てる志があつて荒海を超えて来られた。その船底には九重の石塔が大切に祀られていた。その石塔は飯田山中に聖地を選定し安置された。有り難いことに千年を経た今も石塔を見ることが出来る(今境内にある二基の石塔)。ここぞ知徳が優れた人が居られて仏法を説き、大衆の迷いを救った最初の霊域である。今や朱色紺色鮮やかな高殿の御殿ができて久しい。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



日羅上人太子対面絵図